

## 寄書

### われ等の新年會

木炭の唇

日本水彩畫會研究所新年會は一月二十六日の午後一時から開かれた、僕の會場へ駆けつけたのは丁度一時半であつた、階下の研究室には既に河合先生の批評が始まつてゐる。モ一四五十人も集まつてゐていきれとストーヴの熱とで、急いで來た身には中々暑い。一寸見たところ繪は四五十枚壁に貼られてゐる、今月は繪はいつもよりは少ないが、實質が非常に進歩してゐて何れも眞面目な研究畫ばかりだと、先生達は大に喜んでゐられる。多いときは百五六十枚も出るのだから、成程数は少ないが、僕のやうなウブな目にも皆んな骨折つた繪ばかりだと思つた。先月は丸山先生の飯能地方のスケッチを澤山拜見したが、今月は大下先生の東海道の海の景色圖がある、先生方の出品は是非毎月何枚か願ひたい、これは僕ばかりの希望ではあるまい。

親切な批評が濟んだ。來賓の方もチラホラ

見えた。やがて一同は二階に席を移した、二階は随分廣いのだが、人が多いので少しく窮屈を覺えた、餅菓子のおみツ茶吞茶椀一つ宛銘々の前に置かれた、大土瓶から茶をついて廻る委員の方の勞は多しとせればならぬ、委員のうちから一人立つて挨拶があつた、今日は新年會だから精養軒の洋理に明治屋のシヤンペンを用意する筈であつたが、飲食を主とするよりも楽しく遊ぶといふ方がよいとのことで、一切そんなものを見合せて、たゞ茶菓と夕飯の用意だけにしたとの事だ、僕も大賛成だ、酔つて喧嘩でも始めては大變だ、それよりも遊ぶことに限る、今日は大に遊ぶべしである。

大橋先生の御挨拶があつた、先生は鎌倉からわざわざ來られたとのことだ、次で來賓の戸張先生が米國に居られた時の御話があつた、それけ吾々に極めて有益な御話であつた、先生がアメリカに往かれて、波を専門のリチャードソンといふ先生の家に四年ばかり居られた、この先生は毎日暇さへあれば寫生に出られて、夜分などは書物の挿繪を畫かれてゐた、先生の常に曰はるゝには、繪を研究しやうといふには毎日是非筆を持たねばいけぬ、晝間晝く時間がなかつたら夜分鉛筆畫でもかゝればいけぬ、それから繪を習ふには、初めから大きなものから描き習ふには、初めから大きなものを描まずに、一部分を立派に描く事が必要だそれも出来るだけ正直に寫眞のやうに描くがよい、その修業さへ積めば後には大きな感じの繪をかく事も自在だ、それから修業中に酒を飲むやうな不眞面目の事ではいけぬ、専心美術に心を傾けなくてはいけぬと始終先生は云はれたので、戸張先生も元は酒が好きであつたのだが斷然止めてしまつたそうである、そして新年會といふとドコでも酒をのんで大騒ぎをやらすものだが此會がそのやうな事がなく、眞面目に楽しい集會であるのを大に喜ばれた。戸張先生は猶語をついで、昔しの日本の挿繪畫家にも随分酒飲みがある、北齋の如きは頗る酒好きで、それにプシヨーであつた、物を買つて煮たといふ事がない、いつも煮たものを買つて來て食べた後は竹の皮の机の下へ投込んで置く、他から生物を貰へば近處の人にやつて仕舞ふといふやうな人だ、こん

な人の眞似は修業中は断じて爲てはいけぬといふて話を終られた。

いよく餘興だ、始めに動物園があつた、次には髪毛の長い人が淺黄の上下つけて手品をした、勿論失敗と成功と相半してゐる、ト、デタリカ、デタリーがある、一同大笑ひだ、福引が始まる、随分奇抜なのがあつたか今は忘れてしまつた。

日がくれて來たので下の室へ移つた、瓦斯の光の下にちらしげしの晚餐をやつた、何處からとなく大きな密柑が降つて來た、それを拾ふので一時は大騒ぎをやつた。

是から先生方方にはカルタがある、吾々の方には國旗合せ家族合せがある、アンマさん／＼が始まる、オゼマはドコダが始まる、トンダム／＼が始まる、遠方だからといふて歸る人もある、九時頃には二十人ばかりになつた、僕もこの時御免を蒙つたが、そのあとで又二時間ばかり面白い遊びがあつたそうだ、吾等の新年會は、如斯實に無邪氣に楽しく終つた、萬歳！

## カトウキク

和歌山 晩雨生

二月二日（舊正月元日）、日曜、曇（前略）、一里ほど歩いて、和歌の浦と、小山を背合せにした大浦といふ入江へ來た、其所には、熊野行の漁船が何十艘となく、とまつて居て、それには皆「大漁」と白く抜いたヴァミリオン或はオルトラマリンの旗を建て、ある。それがユラ／＼と揺く波にうつつて居る。而も其赤いのが。

自分は暫く眺めて居たが、描けそうもない又描くべき景色ではない、船は何十艘もある、旗は何十流もある、而もうつつて、居る或は反射して居る形は素敵に立派だ、併し惜い哉變化がない。描いては面白くない見るべき景色だ。自分は今までも、こんな景色に會つた事がある。見るべくして、描くべからざる景色だ。嘗て海拔四千余尺の金剛山頂で、二千五百年前、神武天皇が賊と戦はれた大和平原を見下ろして、かの山陽の詩の「合圍百萬兵、陣雲繞麓黑、臣豈不自惜、受託由面勅、灑泣誓吾旅、爲君鏖鬼賊、」といふ句を心に浮べて、建武の昔に

思を走らした時、言ひ知れぬ懷古の情に打たれつゝ其崇高な景色に見入つた。それは正に見るべくして、描くべからざるの景色であつた。

そこで自分は、ずつと其船の群からはなれて岸に繋がれてあつた、一艘の船を寫生した。寫生したといへば、唯四字でいひ盡してしまふが、それは午前九時から午後一時まで、四時間、即ち一字一時間に相當する其間雲まちりの北風を眞正面に吹きつけられては、何回凍りきつた、無感覺になつた指尖に、息を吹きかけたか知れない、それでも手は無意識？に動いて來たと見える。

正月の事だから、見物人も随分あつた。屠蘇機嫌の漁夫連が、十人も寄つて來たのだからたまらない、而も自分の周圍で一場の畫論が持ち上つたには驚いた。併し彼等は流石専門家である。其批評は實に適切だ。自分はヒヤクとする様な事もあつた。應舉じつないが、彼等によつて、多くの船に就ての智識を得た尙今一つ得たのは、否援けられたのは、一人の漁夫曰く「お前さん何